

未来を創造するリーダー育成推進プロジェクト

平成25年度実施報告書

埼玉県立浦和高等学校

1 学校の現状と課題（平成25年度当初における生徒の実態を踏まえて）

本校では「尚文昌武」の理念のもと、生徒が学習、学校行事、部活動等に全力を傾注した高校生活を送っている。結果として、3年間で人間的に大きく成長を遂げ、一例として平成25年度の東京大学合格者数が46名に達するなど多くの生徒が第一志望への進路実現を果たしている。とはいえ、学習については本校入学時の共通傾向として中学校までの受動的な学習習慣から抜けきれず、主体的な学習姿勢が不足する傾向が顕著となっている。

2 本校における24年度までの取組、及びその成果と課題についての概要

本校では平成22年度から平成24年度までの「進学指導重点推進校」の研究指定において、「第一志望を貫き、現役で進路希望を実現する進路指導の在り方」をテーマとして、平成12年度から取り組んできた「新世紀構想」による実践の総括と年次、進路指導部、各教科それぞれの取組の現状確認をおこなってきた。

そして、上記のような現状を踏まえ、平成23年度に本校としての「次の10年に向けて」の方向性の確認をおこなった。その方向性とは、『「自走する集団づくり」とおして、「尚文昌武の理念のもと、時代の求めるリーダーの育成」を目指し続ける。』というものである。今後、「自走する集団づくり」をキーワードに具体的な方策を整理し、研究を深め、実践していくとともに、リーダー教育の視点で本校教育を視覚化し、更なる研究、実践をおこなっていく予定である。

3 本年度の実践

1) リーダー育成、学力向上に向け、外部人材を活用した講義・講演等の実践について

① 進路講演会

ア 講義・講演等のねらい

毎年秋に「進路講演会」と題し、第一線でご活躍されている著名人を招いての講演会をおこなっている。隔年で文系理系分野の先生方にご講演をお願いしている。高校生という、多様な可能性を秘め自我を確立していく時期に、一流の先生方の専門的な話、ものの捉え方、考え方、その人柄等に直接触れることは、生徒の進路に様々な示唆を与えるはずである。今年度は、10月24日に国際協力機構JICA理事長の田中明彦先生にご講演をいただいた。

イ 講義・講演等の概要

講演題 「21世紀の世界システムと国際協力」

○ 21世紀の世界システム

1970年代にアメリカ、イギリス、日本と、その他の国々との格差が大きくなった（南北問題）。その後、21世紀に入り、韓国や台湾、シンガポールなどの国々が急成長し、全体的に以前ほどの格差はなくなった。しかし、経済成長が著しい一方で豊かさが平均化したわけではなく、問題は解消されていない。加えて、内戦や政府が力をもたない政治的に不安定な脆弱国、地域では経済的貧困や保健衛生上の問題が生じ、海賊の増加など世界全体の安定にも影響を与えている。以上の諸問題を解消するために、国連はミレニアム開発目標を提唱し、JICAも貧困や乳幼児死亡を減らす取り組みを行っている。

○ 日本の国際協力の紹介

- ・技術支援によって、チリをノルウェーに並ぶ世界の鮭輸出大国へ。（日本とチリの鮭プロジェクト）
 - ・ブラジルのセラード地帯の農業開発によって、ブラジルを大豆の輸出大国へ。
 - ・タイ東部臨海開発支援による、産業発展の基盤づくり。
 - ・JICAボランティアによる教育、保健問題に対する支援。スポーツの普及。
- これらの国際協力の結果、現地の貧困の解消のみならず、世界全体に良い影響を与えている。

○ なぜ国際協力をするのか

- ・同じ人種の一員として、困っている国があれば手を差し伸べるべき。
- ・安全保障戦略の一環として、国際協力を行うことは不安定地域の安全化、人間の安全保障、平和構築、地域的課題の解決につながる。
- ・成長戦略の一環として、貧困削減から中間層の創出、市場の拡大、生産基盤の創出は、最終的に日本のメリットとなる。
- ・外交戦略の一環として、友好国の増加。オリンピック招致の成功も無関係ではない。

国際協力をする理由はひとつにしぼることはできず、様々な観点から取り組むことができる。マスコミは日本の国際協力を顔が見えないと報道しているが、JICAとしてその活動を見る限り、現地ではよく知られ、実際は顔がよく見えている。

浦和高校の伝統を踏まえながら、国際協力に限らず世界的規模で物事を見て欲しい。

ウ 生徒の様子（感想）

- ・国際社会における日本の立場についてのお話がありましたが、日本は世界的に見ても高い水準で成長を続けてきた国であるため、国際社会の中でも大きな責任があり、果たさなければならない多くの役割があることを改めて感じました。
- ・今回の田中先生のご講演をお聞きして、これまでの自分の経験とあわせて世界の国々に対してより一層の関心を抱くようになり、また、ニュースで取り上げられない、文書の上では語られない、そういう今の世界の現状を実際に自分の目で見なければならぬと感じました。
- ・JICAの活動については、死の危険があるようなところでも、果敢に困難な問題に立ち向かっていて素晴らしいなと思いました。様々な分野でJICAの活動に協力することができるお聞きし、このような世界のために何かできる活動には前から興味があったので、将来、もし参加できるような機会があるのなら、是非、強

い意志を持って参加したいです。

② 麗和セミナー

ア 講義・講演等のねらい

「麗和セミナー」は、各分野の第一線で活躍する卒業生を招いて在校生の希望者にじっくりと話をしていただく機会である。毎年4～5回程度行われており、先輩の話を聞き、疑問をぶつける非常に知的な会となっている。まさに、生徒の「志」を育てる貴重な機会となっている。

イ 講義・講演等の概要

- 第1回（5月14日）東京大学教授 加藤泰浩氏
「何のために研究するのか ―地球史46億年の解読から南鳥島レアアース泥の発見まで―」
- 第2回（7月8日）本田技研元エンジニア 乙部豊氏
「クルマって面白い ソーラーカー、F1、スポーツカーの開発を通して考えた車の面白さと将来について」
- 第3回（10月4日）元日本経済新聞社副社長 新井淳一氏
「みなさんの世代の日本経済と記者の目」
- 第4回（10月28日）日本証券業協会特別参与 小風明氏
「社会安全政策へのいざない」

ウ 生徒の様子（講演後の質疑）

- ・ どの回も多くの生徒たちからの質問が寄せられ、それぞれの話題や講師の方たちからのメッセージに対する関心の高さが伺われた。

2) 先進校視察について

ア 視察の概要

今年度は、1月末に次の2校への視察をおこなった。

熊本県立熊本高等学校
新潟県立新潟高等学校

両校の先進的な取り組みについてご教授いただくなかで、近年増加傾向にある理系志向・医学部志向の生徒への対応とその指導について、生徒への負荷（課題等）のかけ方やその調整について、校内模試での取り組みなど、具体的にご指導をいただいた。今後の本校の教育活動改善に向けての貴重な視察となった。

イ 報告会等の概要

2校の視察を受けて、進路指導部会及び各年次会で情報を共有したのち、2月の職員会議で進路指導部より報告がおこなわれた。報告は報告資料をもとに視察校別に訪問者が直接報告をおこない、全職員での情報共有を図った。

3) 学校において3年間を見据えた組織的な進路指導体制を構築する取組について

本校では平成12年度から取り組んできた「新世紀構想」による様々な模索を経て

の実践の定着と、平成22年度から平成24年度までの「進学指導重点推進校」の研究指定におけるそれぞれの取組の現状確認により、戦略的な進路指導体制の構築を図ってきた。そして、平成23年度に確認した「次の10年に向けて」の方向性（『「自走する集団づくり」をとおして、「尚文昌武の理念のもと、時代の求めるリーダーの育成」を目指し続ける。』）を実現すべく、改善を図るべく取り組んでいるところである。そのための、校内体制の概要は、次のとおりである。

- ・ 職員間の認識の共有化「進路指導」の定義の確認
- ・ 職員間の情報共有・共通理解「進路指導研修会」（5月）の開催
- ・ 年次団による3年間を見通した指導の改善の取り組み
- ・ 教科による3年間を見通した指導の改善の取り組み

4) その他

① 高大連携ボーイングプログラム

ア 概要

このプログラムは、東京大学がボーイング社の世界的に展開する教育プログラムに参加して、「世界の将来を担うべき優れた科学者・エンジニア」を育成する事業として共同で実施するものである。その中の高大連携プログラムとして本校との連携講座がおこなわれることとなった。

第1回は8月2日に工学系研究科航空宇宙工学専攻の研究室のご指導により、次のようなスケジュールでおこなわれた。

- ・ シアトルのボーイング社とのライブ中継による英語での質疑応答
- ・ 研究室の見学および研究調査
- ・ 未来の飛行機のデザインおよびプレゼンテーション

第2回は3月27日に工学系研究科社会基盤学専攻の航空宇宙工学専攻の研究室のご指導により、次のようなスケジュールでおこなわれた。

- ・ 講義「河川に関わる地理」「河川に関わる物理と生物」
- ・ 「ハッ場ダム」に関するディスカッション
- ・ 水路実験
- ・ 河川に関わる海外プロジェクトについての英語での話し合い
- ・ 東大生とのフリートーク
- ・ 荒川河川流域見学会

イ 生徒の様子

参加した生徒は、実際の大学での研究を体験し、研究生活がどのようなものなのかを感じ取れたようである。まだまだ議論し足りないところはあったようであるが、最先端の研究に触れることができ、あわせて、高校の学びが大学での研究にどのようにつながり、さらには社会でどう生かされていくのか、その一端を感じ取れたようである。参加者全員が充実した表情であった。

② 東大見学会

ア 概要

このプログラムは、これから進学するであろう大学というところの環境や雰囲気を感じ、将来の進路選択の一助となつていけるとともに、研究の現場で今話題となっていることや高校の勉強が大学での研究にどのようにつながっていくのかなどを知

る貴重な機会となっている。今年は、1・2年次生対象で10月18・19日、1年次生のみ対象で11月14日にそれぞれ実施された。

イ 生徒の様子（感想）

- ・ 先生方の言葉を聞いていると、何でもできるような気がしてきた。
- ・ 先生の研究者になるまでのお話を聞き、何をして生きるか決めていなくても自分にとっての転職に出会える、その可能性を広げるためにも今勉強することが大切なのだと思った。
- ・ 初めて東大に行った。いろいろな研究施設を見せてもらったり、話を聞くことができたのはとても貴重な体験だった。ここで学んでみたいと思うようになり、勉強に対しての意欲が湧いてきた。

4 参考資料

なし